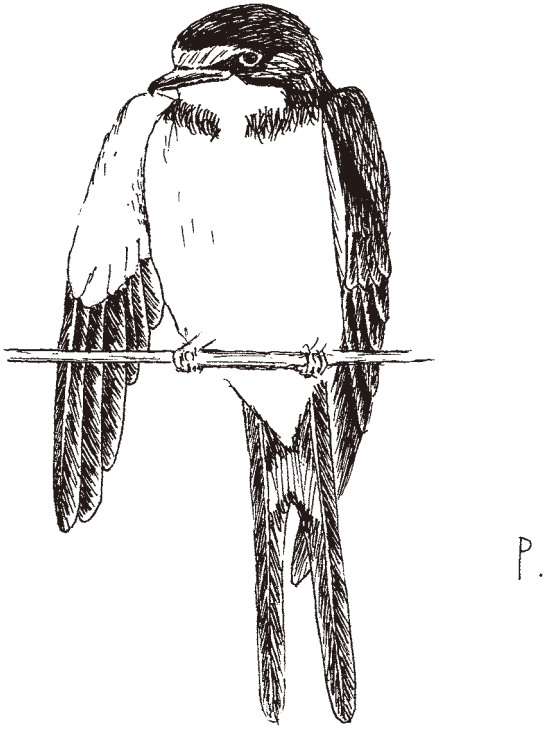
綴葉 ていよう

'18 6

No.368

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

川上未映子著『ウィステリアと三人の女たち』

小野塚知二著『経済史――いまを知り、未来を生きるために』

特集／ライトノベル

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚／研究への誘い

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階

Tel：771-6211 ／ E-mail：teiyo@s-coop.net

綴葉HP：http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

わたしがわたしでなくなる時

ウィステリアと三人の女たち

川上未映子著
新潮社

昨年、村上春樹との対談『みみずくは黄昏に飛びたつ』や『早稲田文学増刊　女性号』の編集で話題をよんだ川上未映子氏の深化した短篇集が刊行されている。『みみずくは』で村上文学を無意識のうごめく「地下二階の世界」を描いたものと語っていた氏だが、本書はまさに日常にひそむ変容の兆しに測鉛を降ろし、読む者の心をじわじわと劇的に、不穏に美しく揺りうごかす四篇となっている。

☆

○**「彼女と彼女の記憶について」**　卒業以来、ずっと地元を離れていた女優の「わたし」は、とつぜん中学の同窓会に行ってみる気になった。都会の装いでふらっと顔を出して、田舎の人たちに「何かを圧倒的にわからせる」ために。さびれた古臭いホテル、若作りのメイク、禿げ頭、ダブルのスーツ。うんざりだ、そろそろ帰ろうと思った頃、ふいに、仲の良かった（けれどまあもちろんそれ以来は思い出すこともなかった）女の子が死んだという話を聞く。ふたりだけの記憶が、時のとばりを透かしてよみがえる。ひとつ、またひとつ……。なんでもない日々は、ありふれたきっかけで暗転するものなのだ。「そしてわたしはいったい今、どこにいるんだろう？」

○**「シャンデリア」**　日々の暮らしを派遣でつないでいた「わたし」はふとしたことから大金を手に入れた。そして毎日、一日中、デパートで買い物をしつづけるようになる。シャンデリア――金さえあれば何でも買えるこの場所の象徴――の落下を待ち望みつつ、ニヒルに、哀しく、事務的に。崩壊の予感に満ちた異色の佳品だ。

○**「マリーの愛の証明」**　マリーはミア寮に住んでいる。自然のなかの、ある種の療養施設。こわい父親はいないからだいじょうぶ。昔つきあっていたルームメイトのカレンとちょっとぎくしゃくしているけれど、正直な思いを通わせたくて。たどたどしくも確かなその歩み。「愛っていうのはきっと、わたしたち個人のものなんじゃなくて、どこかにあるものなの」。世界の優しさが仄見えてくる。

○**「ウィステリアと三人の女たち」**　「わたし」三八歳、九年前に結婚したがなかなか子どもができず、不妊治療を受けようとしても夫は賛成しなかった。子どもの話題は消え、セックスもしなくなった。そんな折、はす向かいの屋敷の解体工事が始まった。老女が出入りし、藤（ウィステリア）の花がきれいだった屋敷。しかし、工事はなぜか中断した。「壊されるときにしか聴こえない音の成分みたいなのがある」という謎の女の言葉に導かれて、夫が出張で留守の真夜中、「わたし」は廃墟に入り込む。暗闇の中で仰向けになり、想像をふくらます。何の部屋だったのか、老女の人生はどんなものだったのか。匂い立つような柔らかい文体で紡がれる想像のなかで、「わたし」は徐々に老女と重なり合う。ひそやかな女たちの園。ひめやかな想い出の光。そして醒めた時、発熱した総身に藤の花びらをまとわりつかせて帰宅した「わたし」は、もう前のわたしではない。　（春海）

（一八二頁　税込一五一二円　3月刊）

人類史を巡る経済の眺望

経済史
——いまを知り、未来を生きるために

小野塚知二著
有斐閣

学際的研究というのは、「知性と反知性」を繋ぐ役割を持っている。専門家が大衆を卑下し研究に閉じこもり、素人が専門の価値を見出さず無知に居直る社会の中で、分野横断的研究は両者の垣根を越えた知の懸け橋となる可能性を秘めているのだ。本書もまた経済学という専門を超えて、人文学や社会科学の知を駆使しながら、多くの人に読まれるべき歴史の眺望を語ってくれる。その中では「経済とは何か」「経済は何故成長しなくてはいけないのか」「人類の文明は持続可能なのか」という、誰もが抱かずにはいられない疑問が人類史を巡る考察の中で深められている。

——欲望が抑えられていた前近代——

著者は、人間とは「際限のない欲望」を持った生き物だと定義する。動物のように生理的欲望だけでは満足せず、権力や財力のようにいくらもっても尽きることのない欲望を備えているのだ。前近代、人間のこのような「際限のない欲望」は災厄をもたらすものだった。増えすぎた人口は時に食糧難から内乱を引き起こし、過剰なエネルギーの収奪は環境を変化させ災害が文明を覆った。ゆえに人類は「際限のない欲望」を抑えるためのシステムを構築した。それは宗教や祭礼・身分制・伝統という形で表出され、人間の欲望を抑える機能を担っていた。

——欲望が解放される近代——

前近代から近代への変化は一足飛びではなく徐々にその条件が付与されていった。絶対王政による主権国家の誕生、宗教改革による意識の変化、大航海時代による交易の変遷、地下エネルギーの発見等により、停滞する前近代は成長する近代へと変化していった。「際限のない欲望」を解放する動きは徐々に拡大をみせ、先進国から後進国へ、男性から女性へ、「豊かさと自由」の価値が広がっていった。著者はこうした動きの中で古典的自由主義から、介入主義へ、そして介入主義への反動としてのネオリベラリズムを考察する。成長する経済活動は自然の自己調整能力を超え出るとこまで到達し、家や国家の機能を低下させていく。本書は前近代からはじまる人類史を俯瞰して、昨今のネオリベラリズムの問題点や、排外的ナショナリズムの原因まで分析されている。

——文明は持続可能か——

「際限のない欲望」が解放された現代文明は、前例のない繁栄をもたらした。自由と豊かさを私たちはもう捨てることは出来ず、安易な前近代へのゆり戻しには賛同できない。しかし格差は広がり、共同性は失われ、自然が疲弊していく社会の中で人々は出口の見えない不安を抱えている。本書はこうした問題に即効性のある答えを出さないが、方向性を示してくれている。残された課題を考えるのは我々読者だろう。専門と素人の垣根を越えて、我々の文明が抱えている諸問題に向き合ってみてはいかがだろうか。　（きもの）

（五九八頁　税込四三二〇円　2月刊）

〈特集〉

ライトノベル

読者から「ライトノベルを扱ってほしい」という手紙を受け取った『綴葉』編集委員会。しかし編集委員の中でラノベに詳しい人はほとんどいなかった。そんな時、編集委員のきものはとあるOPが異様にラノベに詳しいとの情報を得る。真偽を確かめるべく、きものは愛犬円太を連れてそのOPのもとに向かった……。（**きもの**）

きもの（以下「き」）：というわけで、この度はライトノベルに詳しくない読者にむけてラノベの歴史やお薦めの作品などを教えて貰えたらなと思います。

柚木（以下「柚」）：いきなりヘビーな依頼ですね……どこまでできるかわかりませんが、やってみましょう。

七〇～八〇年代：ライトノベル草創期

柚：一般に、ライトノベルの源流は、一九七五年創刊のソノラマ文庫や七六年創刊のコバルト文庫から刊行されていた少年少女向け小説まで遡ると言われています。当時はまだ「ライトノベル」という呼称はなく、「ジュブナイル」や「ヤングアダルト」といった呼称が使われていました。作品の傾向もSFの影響が色濃かったとされています。

き：今でこそライトノベルという呼称は一般的ですが、当初はティーンズ向けの小説という位置づけなんですね。

柚：そうですね。そして八六年にファミコンソフト「ドラゴンクエスト」が発売され、空前のRPGブームが起こります。「ソード・ワールドRPG」のようなTRPGの流行とともに、水野良『**ロードス島戦記**』や深沢美潮『フォーチュン・クエスト』のようなRPG的世界観を下敷きにしたファンタジーがヒットしました。角川スニーカー文庫と富士見ファンタジア文庫という、ジャンルを支える二大レーベルもこの頃創刊されています。

き：現在、荒川弘が漫画化している『アルスラーン戦記』もこの時期の作品ですね。

柚：はい。その後、ライトノベルは漫画やアニメなどの表現を取り込んで次第に独自の表現様式を確立していきます。神坂一『スレイヤーズ』などは、従来の硬派な文章表現に代わってくだけた表現を多用し、そのスタイルは「文字で書かれたアニメ」とも称されました。

九〇年代：電撃文庫の登場

柚：九〇年代に入ると、のちにゼロ年代以降のライトノベルをリードする電撃文庫が創刊されます。そして九五年、阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件が起こった年に、サブカルチャー界に激震をもたらしたあの作品が放映されます。

き：「新世紀エヴァンゲリオン」!!

柚：「エヴァ」とライトノベルの関係はそれほど明確ではありませんが、既存のSFやファンタジーの類型に収まらない緻密

に作り込まれた世界観や、主人公の鬱屈した自意識に焦点を当てた内省的なドラマ、高校生の日常と世界の危機という非日常を結び合せる大胆な想像力などは、後にセカイ系というジャンルを生み出し非常に深いところでライトノベルに影響を与えたように思います。

ゼロ年代：ライトノベルの確立

き：こうした流れの中でゼロ年代に入るわけですね。

柚：「ライトノベル」という言葉が広く定着して、独自のジャンルとみなされるようになったのは大体この時期、二〇〇〇年前後だと言われています。そして、この頃に登場して、以降のライトノベルに決定的な影響を与えたのが、上遠野浩平『**ブギーポップは笑わない**』（電撃文庫）です。

き：ブギーポップ！　懐かしいです。そういえば今年アニメ化するらしいですね。

柚：高校生の等身大の日常の背後で蠢く超常的な陰謀という物語そのものは、眉村卓『ねらわれた学園』や新城十馬『蓬莱学園の初恋！』などの先例がありました。

ブギーポップのインパクトは、ゼロ年代風（ポストエヴァ風）に描かれた思春期の心理描写や、クロスカッティングのような独特の表現に拠るところが大きいでしょう。ブギーポップ以後、「学園もの」や「異能もの」などと称されるフォロワー的な作品が次々と登場し、ジャンルの風景は一新されます。中でも個人的なお薦めは、あざの耕平『**ロクラッカーズ**』。スタンド能力のような異能を発現させるドラッグを巡って少年少女達が闘う物語は、一読の価値があります。

き：異能ものや学園ものは、今でこそ定番になりましたね。そんなゼロ年代は電撃文庫が覇権を握るのでしょうか。

柚：ゼロ年代の電撃文庫からは、多くの読者を獲得することになる名作が毎年のように刊行されます。二〇〇〇年に出た時雨沢恵一『キノの旅』は学校の図書館に入るほど普及し、〇一年の秋山瑞人『イリヤの空、ＵＦＯの夏』はセカイ系を代表する一作と言われました。「生もの」的に消費されがちなラノベの中で、秋山は二〇年後も読み継がれる作品を書ける実力派作家です。『**猫の地球儀**』は今の読者にも薦めたい名作です。

き：今でも耳にする作家ですね。一方電撃文庫以外だとどういうものがありますか。

柚：老舗の角川スニーカー文庫や富士見ファンタジア文庫に加えて、注目したいのが講談社です。〇二年、当時立命館の学生だった西尾維新が『クビキリサイクル』で講談社からデビューし、この「戯言」シリーズやのちの「物語」シリーズによって大ヒット作家になりました。また〇三年には谷川流『涼宮ハルヒの憂鬱』が角川スニーカー大賞を受賞します。学園ものの約束をメタに相対化するこの作品は、このジャンルの成熟を示していると言えますね。戯言やハルヒに見られる一人称の饒舌な文体は、その後のトレンドにも一定の影響を与えました。

き：この時期のラノベはすごい人気でしたね。自分も本屋に毎週のように通って新作のラノベをチェックしていました。

柚：この頃は本当にライトノベルというジャンルにとって多産な時期でした。七〇年代から九〇年代にかけて形成されたＳＦやファンタジーの伝統も進化を遂げ、鬱展開や過激描写から「暗黒ライトノベル」と称された藤原祐『**ルナティック・ムーン**』（電撃文庫）や浅井ラボ『**されど罪人は竜と踊る**』のような作品を生み出しました。

き：確かに中二病心をくすぐる暗くて救いのない作品も多かったですね。ゼロ年代後半になるとどうでしょうか。

柚：ゼロ年代後半に入ると、セカイ系に代わって「日常系」と呼ばれる、少年少女の平凡な生活を描く作品が増えてきます。伏見つかさ『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』、葵せきな『生徒会の一存』、平坂読『僕は友達が少ない』などがヒットし、シリアスなテーマを扱う作品は相対的に影が薄くなった印象です。加えて、ぜひ言及しておきたいのが、シリーズものが書かれやすいライトノベルの中にあって、一巻完結の独創的な作品も書かれていたことです。刊行当時「イラストがないライトノベル」として話題になった御影瑛路の青春サイコミステリ『**僕らはどこにも開かない**』、電撃大賞を受賞した紅玉いづきの童話風ファンタジー『**ミミズクと夜の王**』、スーパーダッシュ小説新人賞を受賞したアサウラの胸を抉るガンアクション百合小説『バニラ』など、軽い興味で手に取りやすい分、今の読者に薦めたい作品は色々あります。

越境するライトノベル

柚：もう一つ、ゼロ年代後半の注目すべき動向として挙げられるのが、メディアミックスの普及です。それまでも『スレイヤーズ』などの先例はありましたが、この時期からアニメ化のペースや作品数が目に見えて増えてきます。〇五年に高橋弥七郎『灼眼のシャナ』が、〇六年に前出の『涼宮ハルヒ』がアニメ化され、特に後者は大きな反響を呼びました。ニコニコ動画にOPのダンスを踊る動画が大量投稿されたのは印象的でしたね。

き：確かに最近ではアニメを通じて作品を知ったという読者も多い気がします。

柚：他方、ゲームシナリオライターがライトノベルに進出する例も増えてきました。中でも話題になったのが、〇七年にガガガ文庫から『人類は衰退しました』を出した田中ロミオですね。彼の『**AURA～魔竜院光牙最後の闘い～**』（ガガガ文庫）は「中二病でも恋がしたい！」を先取りする中二病ものの傑作でした。

一〇年代：ネット小説の台頭

き：一〇年代になってからのラノベの変化はどのようなものが目立ちますか。

柚：追い切れてはいませんが、一〇年代の特徴は何と言っても、川原礫『**ソードアート・オンライン**』や、佐島勤『魔法科高校の劣等生』を筆頭に、ネット小説をベースにした作品が次々とヒットしたことでしょう。その後、現代社会に生きる主人公がテンプレート的なファンタジー世界に呼び出される「異世界転生もの」が流行しています。そんな中、個人的に注目している作家の一人が石川博品です。独創的な世界観と胸を打つ心理描写が光る作家で、今後の活躍に期待しています。

◆お話を聞いて

――今でこそ本屋に平積みにされているライトノベルも、多くの読者に読まれるようになるまでには紆余曲折した歴史がありました。他のサブカルチャーや文芸史との関係も深く、ラノベの俯瞰した研究を知りたい方は山中智省『**ライトノベルよ、どこへいく**』がおすすめです。セカイ系から日常系へ、そして異世界転生ものの普及など時代によってジャンルごとの変遷もありますが、何より重要なのは粗い視点では見えてこない名作たちでしょう。インタビューで触れた作品に加えて、最後に改めて紹介したいラノベを次ページで載せたいと思います。

トリックスターズ
久住四季著
メディアワークス文庫

現代日本の大学を舞台にしながらも魔術というファンタジックな要素をうまく融合させた良質なミステリーは他に類を見ない。当初電撃文庫から刊行され第六巻を以て「第一部完！」となったが、約一〇年の時を経て二〇一六年にメディアワークス文庫に再録された。推理小説とも楽しめ、大学青春小説としてもお勧めの作品。

一巻（四〇〇頁　税込七二四円）

りゅうおうのおしごと！
白鳥士郎著
ＧＡ文庫

将棋界隈のありとあらゆる逸話をライトノベルに昇華させた実力作。才能にあふれる前途有望な少年少女のスポ根＆ラブコメが主軸だが特筆すべきは第七巻。全盛期を過ぎ負けが込む中年棋士の悲哀という、将棋フィクションにおいて従来脚光を浴びることのなかった題材に焦点を当てた感涙必至の一冊に仕上がっている。（投稿・円太）

一巻（三一二頁　税込六五六円）

ムシウタ〈01〉夢みる蛍
岩井恭平著
角川スニーカー文庫

本書を読み返すと忘れかけていたあの頃が蘇る。異能ものやバトルものとしても楽しめるけれど、何よりも「自分の居場所がほしい」と夢見る少年少女たちの葛藤が、あの頃は切実に共感でき、今になると少しほろ苦いのだ。思春期の不安定さと、その揺らぎがもつ力がきれいに表現されている。ムシウタは私にとっての青春の記念碑だ。（きもの）

一巻（三四二頁　税込六九一円）

ウィザーズ・ブレイン
三枝零一著
電撃文庫

状況が否応なしに誰かの犠牲を強いる世界で、それでも「誰も犠牲にしたくない」という子供じみた願い。そんな願いから始まった物語が、一七年もの月日を踏みしめながら、そしてあまりにも悲痛な挫折を噛みしめながら結末へ向けて加速する。「明日を夢見るのを諦めない」子供たちと大人たちの闘いの行末を、一緒に見届けてほしい。（投稿・柚木）

一巻（三六八頁　税込六五九円）

戦闘城塞マスラヲ
林トモアキ著
角川スニーカー文庫

目つきが悪いことだけが取り柄（？）の引きこもり男が、相棒の電子精霊とともにハッタリと知略で魔人や吸血鬼たちがぶつかり合うバトルロイヤルを勝ち抜いていくコミカルファンタジー。ノリのいいキャラクター同士の、緊迫しながらもどこか笑いを誘う駆け合いに彩られた物語が、ラノベらしい軽妙で爽快な読後感を与えてくれる。（投稿・柚木）

一巻（二五三頁　税込六四八円）

後宮楽園球場
ハレムリーグ・ベースボール
石川博品著　集英社スーパーダッシュ文庫

ハーレムラブコメ全盛の時代に、まさか実際の後宮（ハーレム）を舞台に、しかもラブコメではなく熱血野球小説が書かれるなどと誰が想像しただろう。そのうえ、青春小説・野球小説・宮廷陰謀小説として非常によく練り上げられているのだ。時折、こんな作品を書いてしまう作家が出現するのもラノベの魅力の一つ。決して色ものと侮るなかれ。（投稿・柚木）

一巻（三一五頁　税込六九一円）

新刊コーナー

君を描けば嘘になる

綾崎隼著
KADOKAWA

ミステリ仕立ての恋愛小説を作風としてきた著者から、作家活動八周年の節目にテイストの異なる小説が出た。本書はある美術教室を舞台とした青春群像劇である。画家としての圧倒的な才能を持つ少女、灯子。その灯子を中心として、彼女の芸術と人間性が放つ磁場へと、アトリエでの周囲の人間が巻き込まれてゆく。交錯する人間関係と勃発する様々な事件に揺れる青年たち。灯子とその周囲の人間のそれぞれの視点から綴られる四つの章が、嫉妬や絶望と恋心や希望とが綯い交ぜとなった、彼らの瑞々しい感性を描き出す。

その描写がリアリティを帯びているのは、各章どれもが青年特有の不器用さや不安定さを活写しているからである。一方で、アトリエの中心的存在たる灯子は、文字通り周りが見えなくなるほど芸術へ傾倒している。他方で、自分の世界に没入する灯子の勝手な振る舞いに振り回される周囲の人間は、彼女の巨大な芸術的才能を前にして彼我の差に打ちのめされながらも、同時に彼女に対して抱いてしまう強い憧憬にやはり芸術制作へと駆り立てられてゆく。ともに芸術への向こう見ずな情熱を燃料として、自走する中心とそれを追走する周囲――そんな両者の非対称的な関係性は、各々が生々しい感情を（振る舞いに、あるいはキャンバスの上に）露わにして互いに衝突し合うことを通じて、逆転し始める……。その青春の疾走の行きつく先とは？あなたの目で確かめてほしい。（投稿・海）

（三一〇頁　税込一五一二円　1月刊）

ブッチャーズ・クロッシング

ジョン・ウィリアムズ著
布施由紀子訳　作品社

一九世紀、エマソンの思想に影響されてハーバードを中退し、バッファローの狩猟と皮の加工が主産業のブッチャーズ・クロッシングにやってきた青年アンドリュースは、縁をたどり秋のコロラド山中での過酷なバッファロー猟に同行する。西部開拓時代の青年が本当の自分を「カントリー」に求める長編だ。

同行者となるミラーは、自然の一部となった優れた狩人であり、青年の眼前でバッファロー達を徹底的に殺戮する。青年がカントリーに求めていたものと、自然から糧を得る者が身に着けた姿勢の乖離が、殺戮の無味乾燥さに加えて、山の凶暴性があらわになるにつれて明らかになっていくところが、本書の山場の一つだろう。

また、青年が自然を知ることが、唯一の女性登場人物である元娼婦のフランシーンに対する感情を変化させていく過程にも注目したい。夢見た自然の本当の姿を目の当たりにする、その同じやり方で女性を直視するラストシーンには、青年がひんやりとした虚無をまさに獲得しようとする（大人になっていく、といっていいのかわからないが）瞬間が、非常に印象的に描かれている。

西部開拓時代の物語ではあるが、ウエスタンとも、青年の成長物語とも言いにくい。本書は、自然の中に求めうる「自分」とは何なのか、自然を糧にすることは、人をどのような物に変えていくのかを怜悧な眼差しで描き、その正体についての答えを読者に預けている。読み応えと余韻ある傑作。（トロ）

（三三九頁　税込二八〇八円　2月刊）

知ってるつもり 無知の科学

スティーブン・スローマン、フィリップ・ファーンバック著
土方奈美訳　早川書房

無知という概念は身近なものである。何かを学んでいれば自らの無知を痛感させられる。また、ある人がものを知らないと話ることもあるだろう。しかし、あなたは無知についてどの程度ご存知だろうか。この問いに、よく知っていると答えた方にはぜひ本書の一読を勧める。おそらくは、「知っているつもり」という罠にハマっているからだ。

人はなぜ誤った考えを抱いてしまうのか、そして、それでもなぜ文明を発達させられるほどに賢いのか。こうした疑問について認知科学的な観点から解説する本書は、ポピュラーサイエンスとしても、実用書としても秀逸な一冊である。本書の中心的なテーマは、個人の無知と集団の叡智と言えるだろう。世界は複雑であり、個人はそれについてあまり多くは知らない。また、人間の思考には癖があり、間違った考え方をしてしまうこともある。しかし、それでもうまくやっていけるのは、人間は周囲のモノやコミュニティといった環境との相互作用により思考するため、個人としての賢さよりも集団としての賢さのほうが重要だからだという。この指摘は、「賢さ」という概念の捉え方に変更を迫るものであり、貴重だ。本書ではさらに、コミュニティとしての賢さという観点から、科学の理解や政治の方法についても検討される。もちろん、「賢く」なるためのアドバイスも豊富に紹介されている。

誰でも楽しんで読める上、新たな視点も与えてくれるかもしれない一冊だ。　（蕨餅）

（三二〇頁　税込二〇五二円　4月刊）

食べることの哲学

檜垣立哉著
世界思想社

食べることって、気持ち悪い――こんなふうに思ったことはないだろうか。器用な箸さばきで料理を口に運ぶさまはあまりに洗練された所作である一方で、食べ物を受け入れるためにぽかりとあけられた口は動物的なだらしなさを露呈する。われわれは人間であり動物である――この矛盾を突きつけられる。

本書に通底するのは、食べることには人間の文化的側面と動物的側面とのせめぎあいが表出している、という認識だ。これをベースに「豚のPちゃん」をめぐる食育の授業や反捕鯨映画『ザ・コーヴ』などのさまざまな素材が、現代思想のスパイスをきかせて手際よく調理されている。著者は「人間は毒を食べる」という刺激的なテーゼを提示する。つまり「毒」とは自分の存在を脅かす他なるものだと定義すれば、つねに「自分」ではないものを食べる（カニバリズムは古くからのタブーである）われわれは毒をこそ食べているのだ。逆に、生物学的自然を拒絶する断食は、毒の拒否という点において自己を純化する行為だとみなされる。そのなかで著者のだした結論は「毒であれ食べつづける」ことだ。人間と動物、自己と他なるものの境界を飛び越えて毒を受け入れるわれわれ人間、その可能性。人間が根源的にもつ能力には、他を受け入れるというものがあるのではないか。

両義性を抱えた人間において「口をあけている」深淵はあまりにも不気味だが、それでも覗きこんでみたくなる奇妙な魅力をそなえていることは間違いない。　（ミセ）

（二〇八頁　税込一八三六円　4月刊）

スピノザと動物たち

アリエル・シュアミ、アリア・ダヴェル著
大津真作訳　法政大学出版局

〈私たちは動物を、自らより下等な生物として見ている。〉昨今の動物愛護なども人間が保護してあげねばならないという上から目線の考えが盛り込まれていることは想像がつく。しかし、スピノザの動物の捉え方はそれらの考えとはやや異なる。彼にとって人間と動物は優劣という次元を超えたものなのである。では、それはいかなるものか。

本書は、スピノザの専門家である著者のスピノザの解説書であり、そこに美麗な動物のイラストを添えた新しい形の哲学書である。そもそもそういう形式になっているのもスピノザという人が自らの著書で動物に関する言及を多数しているためである。まず冒頭で著者はスピノザの蜘蛛についての話からスタートする。蜘蛛の巣について《蜘蛛が張る蜘蛛の巣は、人間には非常な困難をもってしか作ることはできない。一方、人間は、おそらく天使にさえ不可能な、実に多くのことをきわめて容易になし遂げる。》と言う。蜘蛛の巣というのは、人間から見たら複雑であんなものを作るのはかなり困難であるけれども蜘蛛にとっては容易い。しかし、人間は同じ蜘蛛の巣を作るのは困難であるけれども作れないわけではない。自らの理性を使って機械で蜘蛛が作る巣よりも繊細な巣を作ることができる。つまり、同じことをやっていてもそれぞれの優劣ではなく、蜘蛛には蜘蛛の、人間には人間の本性があるのみなのだ。

人間と動物の関係をスピノザ哲学によって読み解いていく一冊である。（ういろう）

（一七三頁　税込二九一六円　12月刊）

現代魔術の源流［黄金の夜明け団］入門

チック・シセロ、サンドラ・タバサ・シセロ著
江口之隆訳　ヒカルランド

オカルティズムが隆盛を極めていた一九世紀末の英国。神智学協会の東洋的転回という事態にあって、黄金の夜明け団は西洋オカルティズム伝統を実践的に担う秘密結社として擡頭した。ありとあらゆる西洋秘教伝統の蓄積を体系化した黄金の夜明け団の魔術は、その後現代にいたるまで多大な影響を及ぼし続けている。

形而上学理論の混淆の大胆さや、儀式のおどろおどろしさは思わず呆れかえってしまうほどだが、魔術の効用の顕現は意外にも地味である。「たとえば魔術師がコンピュータを手に入れるための儀式を行った」とすると、「しばらくたつと、友人がコンピュータをアップグレードしたので古いのをくれたりする」。このような記述からは、スピリチュアル系自己啓発として広く影響力をもつニューソートの秘教版として魔術を捉えることも可能だろう。事実、両者には小宇宙と大宇宙の「照応の法則」という顕著な共通性がある。

占星術や占術、錬金術、スクライング、エノク魔術など、多岐にわたる知的かつ霊的な諸技能の高度な習熟に要する労力は、制度化された諸学問の学習と比しても、まったく見合わないという印象を受ける。とはいえ、象徴と寓意と類比を十二分に駆使し、悟性的科学知とは別の仕方で、世界の真理や自己の内奥を探究する技術として、捨て難い魅力を感じる向きも決して少なくないだろう。文化史的、あるいはそれ以上に実践的関心からも読まれて然るべき一冊だ。（霊人）

（三八一頁　税込三六〇〇円　12月刊）

「投壜通信」の詩人たち
〈詩の危機〉からホロコーストへ
細見和之著
岩波書店

もし電波の通じない絶海の孤島に流れ着いたとしたら、どうやって助けを求めるだろうか？　焚き火の煙を上げてみる？　目印に旗でも作ってみる？　けれども船は通らない。自分が生きていることだけでも知らせるべく浜辺に打ち上げられた壜に言葉を封じて海に流す。届くかどうかわからぬ願いと不安を託されてあてどもなく漂う壜。

そのようなイメージに貫かれて著者は近代の著名な詩人たちの営みを読者の前に紐解いて見せる。最初は言葉の意味を違う言語に翻訳することの困難を。それはやがて、時代の流れから外れた者たちのひっそりと遺した置手紙にも似た作品へと発展していく。ポー、マラルメ、ツェラン…。時代も国も異なる彼らに共通する詩作の作業を著者は漂流者の行為になぞらえてみせた。「投壜通信」という出版物があったわけではない。

彼らが詩という「手紙」を流した海、それは何を意味するのか？　敢えて言えば「時代」だろうか。そして彼らが詩に託したもの、それは難破船の漂流者が投壜の手紙に託したのと同じ、己の生きた証、だったのかもしれない。そのことからは、世間に超越して詩作に耽ると見える詩人ですら世界に、時代に関わりを持つことを望んでいたという現実が浮かび上がる。さらに彼らを漂流させた「時代」という大きな海原のイメージも。

ならば、著者がこうして世に出した本書もまた「投壜通信」と言えるかもしれない。さて本書に託されたものは何だろう？（ねこ）

（三三六頁　税込三三四八円　3月刊）

いま、「非戦」を掲げる
西谷修対談集
西谷修著
青土社

西谷修は稀有な思考者である。「世界戦争の世紀」を証言する哲学や文学に、現代における人間存在の条件を聴き取る初期の戦争論。その現代を制度的に規定する世界史的経緯、およびそれに鬼子のように孕まれた新たな生存を語る次のクレオール論と、その世界史の帰結を支配する経済レジームの批判的分析。さらに、独自の歴史的視座（人間の生存条件の世界史？）にもとづき、現在の具体的な状況に即して来るべき生存のあり方を探求する、昨今の重要な批評の諸々。――そしてかくも豊饒な言説実践のエッセンスが凝縮され、地政学、中東、日本の統治構造、沖縄、三・一一後など広く「戦後七〇年」のテーマに即して深められるのが、各専門家との対談を収めた本書だ。

書名の宣言も例外ではない。《……というのは、「平和」はそのために戦争するといった言い方もできる。だからむしろはっきりと「非戦」を原理として……》。書名と同題の対談で示されるこの提言は、一方で、いま戦争が「安全保障」の名目で恒常的な統治の枠組となっており、他方で国家間関係を枠としてグローバル化を捉えて脅威を煽ることが、地政学上の致命的な認識的欠落を孕んでいること、この指摘の上になされたものである。

学ぶべきは、我々自身の具体的な生存の問題から足を浮さないその精神である。この一点でだけでも著者は、我々の思想的怠惰をその実践を通じて鋭く問い糺す、得難い師たりつづけてくれているのである。（投稿・犬）

（三四四頁　税込二八〇八円　12月刊）

西南役伝説

石牟礼道子著
講談社文芸文庫

ものごとには常に表と裏がある。司馬遼太郎の『翔ぶが如く』が表舞台のドラマを描いたものなら、強い社会的・政治的問題意識と清らかな詩魂に支えられた石牟礼道子の『**西南役伝説**』は、徹底して裏の実相を綴ったものだ。ことし二月に惜しまれつつ世を去った作家は、『苦海浄土』の執筆とほぼ時を同じくして、九州中南部の百歳を超える文盲の農民たちが語った「近代」を書き記していた。

〈あの歴史年表とかいうものをあずかり知らぬ細民ひとりの百年の、まだ生きている中身が、秋の日ざしに匂い立つ渚の家の囲炉裏ばたに座っていました〉。西南戦争、日清・日露、太平洋戦争、水俣の公害までを一身に経験した彼らの土着の言葉が身に迫る。〈なんだったかいな、ああ西郷さんのいくさな〉〈御一新とはどがな世が来るかと心配しとったら、案のごとく人を奪ってゆかいた〉〈下々が手をすけて、きつか目に遭うて、上ば座らせておく〉。支配権力の陰の、抑圧されながらもしたたかで伸びやかな営みだ。

本書にはまた、天草諸島から薩摩へ藩の政策で移住した人々についての史料を綴る章やフィクションの物語も挿入され、重層的な奥行きが与えられている。切支丹への関心や民俗学的で民衆史的な興味にも応えてくれよう。

「西郷どん」の「明治一五〇年」。周縁の維新に、戦争が通り過ぎていった民の生活に、どれだけ目を凝らせるか。耳を傾けられるか。幾重にも交錯する「近代」の諸相は、我々を根底から問うているのである。　**（春海）**

（三一五頁　税込一九四四円　3月刊）

白老における「アイヌ民族」の変容

西谷内博美著
東信堂

本書は博物館の国営化の迫るアイヌ文化政策の拠点白老のコタンの明治～昭和の歴史をアイヌの熊送り儀礼（イオマンテ）へのまなざしから見る研究書である。著者は開発経済学者であるが、本書は近代アイヌ自身の言説史として十分な内容を持つ。

天皇・皇族の視察を受け、戦前からアイヌ観光の拠点として発達した白老は戦後観光用コタン「ポロトコタン」が整備され、アイヌの先住性承認の運動の一拠点にもなった。イオマンテが明治天皇の天覧を受けてから観光化するも動物虐待として野蛮さを指摘され、それが多文化主義の流れのなかで誇るべきアイヌ民族の文化になった、その変遷を追う本書は決して豊富とは言えない近代アイヌの思想史としても貴重である。だが本書の眼目は恐らくそこにはない。

それは本書がアイヌ民族という枠組み自体を「想像の共同体」とし、極めて構築主義的な立場でアイヌの分析を行うところである。アプローチはいまや珍しいものではないが、それを刃として想定上の「強者」にだけ向けるものも多い。その中で「弱者」に捉えられがちな先住民の側を脱構築するアプローチは方法論として学ぶところも多く、北海道学以外の観点からも楽しめる仕上がりである。

登場人物に共感的に「忖度」しすぎる傾向や白老や二風谷（にぶたに）以外（道東など）への視野に乏しい部分はあるが、それはむしろ後学の課題となろう。アイヌの「先住民」化から一〇年目の挑戦的な一冊。　**（投稿・とうこ）**

（一七六頁　税込三〇二四円　1月刊）

地図から消される街
3・11後の「言ってはいけない真実」
青木美希著　講談社現代新書

3・11から七年の月日がたった今、福島の状況が、かつてほどの重みをもって伝えられることは減ってきた。しかし七年は、一度津波により崩壊し、被曝の危険も失われていない土地に再び暮すにはあまりにも短い時間だ。本書は、故郷に帰れない、帰りたくない、そんな被災者の現状に長期にわたって寄り添い、「福島の今」を世に問う一冊だ。

ひとたび現地職員となったために、被曝の危険と隣り合わせながら、原発の仕事から逃れられない男たち。除染のため全国から集められた作業員は汚染物を投棄させられ、被災地復興のための価値ある仕事という誇りを踏みにじられる。放射能をおそれて避難した先の東京では、被災者への偏見が、子どもへのいじめの形で現れ、被災者を追い込んでいる。

七年の月日を経ても残る被災の傷跡は、今も人々を苦しめている。再稼働の議論はあえてしないが、いつかは再び起きるだろう事故で、真直な対処がなされるだろうか。そんな問いを持ちながら、復興の今を見つめていく必要がありそうだ。（トロ）

（二八四頁　税込九九三円　3月刊）

カミングアウト
砂川秀樹著
朝日新書

近年、同性愛者の権利が少しずつ認められ、性的マイノリティの話題をメディアで見かけることも増えた。しかし本書のデータでは、まわりに同性愛者はいないと思っている人は九割ちかい。知識として「知っている」ものの、両者が互いに「出会う」ことは稀だ。

著者いわく、「カミングアウトは、伝える側と伝えられた側との関係が作り直される行為だ」。カミングアウトすることで、彼らは「出会う」。カミングアウトの是非を語るにはそれをよく知る必要があるとの考えから、本書にはゲイである著者自身のものも含めた八つの体験談が散りばめられている。そこでは自分のよく知る相手が突然他者として現れ、互いに戸惑うさまが描かれる。しかし相手の「変わらない」部分を再確認することで、関係は「変わって」ゆく。関係の作り直しとは、つくりあげてきた信頼の基盤のうえで互いが変化してゆくことなのだ。

「本当のわたしを知ってほしい」という願いをもつ人は、見えないだけできっといる。そんなあなたに寄りそう一冊だ。（ミセ）

（二二四頁　税込八二一円　4月刊）

ライシテから読む現代フランス
政治と宗教のいま
伊達聖伸著　岩波新書

欧州でイスラム過激派によるテロが相次ぐ中、宗教と政治の関係をどのように考えていくべきか。この課題は、昨年フランス大統領選挙でも主要な争点となった。本書はフランスの政教分離「ライシテ」に着目し、歴史的に宗教と政治がどのように位置づけられ、関わり合ってきたかを辿りながら現代の宗教問題を考察するものである。

かつてカトリックと共和主義者の間で繰り広げられた闘争を経て、信仰の自由を保障する制度として確立したライシテは、イスラムを前に政治的な変革を迫られている。公の場でイスラムを禁止する動きが背景にあるからだ。しかし本書は、ライシテとイスラムが単純な二項対立に陥る問題でないことを示唆しており、双方の議論を通して共生と分断の社会を生きるフランスの姿を浮き彫りにする。

他者に不寛容な宗教に対し、自らは寛容になれるか。不寛容に対しては不寛容で制することが正しいのか。複雑極まりない現代宗教問題において、解決の糸口を探る方におすすめしたい一冊である。（投稿・はりねずみ）

（二五六頁　税込九〇七円　3月刊）

浦上四番崩れ――信仰と強さ

去る五月三日、津和野の乙女峠まつり、幕末・維新期のキリシタン弾圧である「浦上四番崩れ」において津和野への流刑の一五〇周年を記念するミサに参加した。この出来事については、史実にも興味深い論点が多々あるのだが、ここではすべて割愛し、二人のカトリック作家が自らの信仰を込めて執筆した著作を紹介したい。

永井隆と強い信仰

最晩年の永井隆が、迫害されたキリシタンの守山甚三郎が綴った手記などを元に著した『**乙女峠　津和野の殉教者物語**』は、「殉教者の血は奉教人の種」という命題とともに、殉教者と非棄教者が信仰を守り抜けたのは聖霊の働きに依るという神への讃美が全篇を貫いている。飢えながらも、役人からの菓子の誘惑に抗し、「ハライソにはそげんお菓子より、もっともっと甘か物あると……」と固辞して殉教した幼子の強い信仰には、弾圧に対する輝かしい勝利の栄光がみてとれる。このような場面は仮に作家の創作であればグロテスクな印象を与えかねないが、逆に本書のように事実に即した描写であれば、強い信仰者の実在として大いなる希望となる。後に甚三郎は殉教した弟と神との約束に従って息子を司祭にまで育てあげるのだが、その司祭こそ永井に洗礼を授けた人物であると巻末で明かされる。生命を賭して守り抜かれた強い信仰の種はこのように永井にまで連綿と継承され、そして本書を通じて読者にまで届くのである。

遠藤周作と信仰の強さ

遠藤周作の短篇集『**最後の殉教者**』の表題作は、永井と同様に、浦上四番崩れにおいて浦上中野郷から津和野へ流配されたキリシタンらを活写しているが、特に喜助という人物像に作家の創造性が窺える。喜助は臆病さゆえに、捕縛された長崎桜町牢で早々棄教する。しかし、「わたしを裏切ってもよかよ。だが、みなのあとを追って行くだけは行きんさい」という神秘的な声を聞いて津和野へ向かい、改心戻し、つまりキリシタンであることの再申告を経て、迫害に耐える仲間と共にいることを選ぶ。弱い人間が捨てるに捨て去れない信仰の――そして神の愛の――執拗な強さがここにはある。

遠藤が二十余年後に同じ題材に再び取り組んだ長篇の『**女の一生一部・キクの場合**』では、中野郷のキリシタンである清吉に想いを寄せる、隣の郷出身の非キリシタンであるキクの一生が描かれる。津和野で迫害されても棄教しない清吉の信仰を理解できないキクは、清吉が敬愛するマリアへの嫉妬交じりの愚痴をこぼすようになるのだが、それは次第に祈りへと近づいていく。キクは僅かでも清吉の助けになろうと、長崎奉行所の役人として清吉らを拷問する伊藤清左衛門に体を売るのだが、結核にかかり清吉に会えないまま病死する。キリシタンを虐待し、キクの体を奪いながらもキクの無償の愛に打たれ、罪責感に苛まれていた清左衛門は後年、悔い改め、キリスト教に入信する。本書でも遠藤が描くのは、栄光ある強い信仰からは周縁化された、人間の弱さを見据えて受け入れる神の赦しへの信仰の強さであり、それは魂の奥深くまで滲み入る慰めである。

乙女峠の殉教者が埋葬された荘厳な「至福の園」とは対照的な、現地で奉仕されていたシスターからその存在を教えられた、二人の棄教者の矮小な墓には、独特の感慨を催すものがあった。（**霊人**）

ガイドブックのガイド

何らかの意味でルールがあり、結果の評価がなされるものにはゲームの攻略本や受験の参考書のように、大抵その「攻略本」が存在する。「研究」も例外ではない。テーマの探し方から論文の執筆、資金の獲得に至るまで、研究をうまくやるためのノウハウを紹介した書籍が多数出版されている。これらはプロ向けに書かれたものが多く、例えば学部生が読んで得るところは少ないように思える。ところが、こうした書籍の中には、案外応用の範囲が広いものもある。レポート作成や卒業研究などに役立つのみならず、適切な「誤読」によって仕事術としての解釈も可能である。本稿では、こうした書籍をシーン別に紹介する。

研究を始めよう

研究を始める前に知っておいたほうがよいことは多数ある。『**なぜあなたの研究は進まないのか?**』（メディカルレビュー社）は、自分の研究が進まないことに気づく前に読んでおきたい一冊である。研究テーマの選定から始まり、実際の研究の進め方、精神面のマネジメントまで、よくある落とし穴とその解決策がコンパクトにまとめられている。将来的に何らかの研究をすることになりそうなら、転ばぬ先の杖としてぜひ心得ておきたい内容である。

テーマがおおよそ決まれば研究に取り掛かることになるが、まずは文献を集めてテーマをより具体的にし、研究計画を立てる必要があるだろう。この文献レビューの方法について丁寧に解説するのが『Doing Your Literature Review: Traditional and Systematic Techniques』（SAGE Publications Ltd）である。洋書なのでやや読みづらいかも知れないが、情報の収集と検討の方法はこれ一冊で十分身につくだろう。

論文を書こう

研究の成果が得られたら、多くの場合、それは論文で発表することとなる。この際ありがちなのは、筆が進まないことである。類似の状況を体験したことのある読者も多いだろう。締め切りは迫るが一行も書けないという窮地に陥らないために、『**できる研究者の論文生産術**』（講談社）の一読を勧める。本書には、たくさん書くための方法はもちろん、文体や論文の形式などについての解説も載っているので、論文を本格的に書き始める前に読んでおくとよいだろう。心理学者の手によるだけあって、効果は覿面である。

もし、あなたが研究者を目指している、あるいは研究者コミュニティのリアルを知りたいならば、『**ヒラノ教授の論文必勝法：教科書が教えてくれない裏事情**』（中央公論新社）はおすすめの一冊である。かなり数理科学よりの内容ではあるが、研究者としての生き残りを図る「必勝法」は生々しく説得力がある。

おわりに

研究は道楽ではなく、どちらかと言えば多少の苦しみを伴うものである。以上に挙げた書籍がそれを和らげ、読者が研究の楽しみを発見する一助になれば幸いである。

（蕨餅）

編集後記

そろそろ梅雨で鬱陶しい時期になってきました。梅の雨というのだから梅の実が雨あられと降ってきたらそれはそれで面白いなと思ったことをきっかけに自家製梅酒を作ってみようと思い立ち、実際に作ってみました。口の広い瓶に水洗いした梅の実と氷砂糖と果実酒用の酒を入れて寝かせるだけ、案外簡単に作れてしまう。作るというより出来ると言った方がいいのかもしれませんね。人間は材料を用意するだけ、あとの工程は……、何がやってくれるのでしょう？　化学反応？

確かにそれで説明はつくけれど、そうはっきり言ってしまうと味気無い。敢えて言葉にしないことで想像の余地を残しておく。人の手によらない何かがそこに働き、人間はといえば出来上がるのをもっぱら待つ。「果報は寝て待て」というけれど、果酒も寝て待ちましょうか。一年で昼の時間が最も長い時期に昼日中から寝ていられる私は果報者、勿体ないというならば雨の音を聴きながら『綴葉』の本と書評を考えようかな。そんな感じでダラダラと相手任せの一日を送っているのです。人間の主体性もへったくれもありませんね。仕方ない、「ねこ」ですから。　（ねこ）

当てよう！ 図書カード

梅雨の季節になりましたね。雨の日は気分が憂鬱になりがちですが、小説のような出来事が起こりそうな気分にもなります。傘を忘れて佇んでいると、気になるあの人が傘を差しだしてくれる……なんて。……妄想はさておき、問題です。次の小説のうち、雨の降る場面がないものはどれでしょう？

1. 『羅生門』　2. 『舞姫』
3. 『こころ』　4. 『人間失格』

（ミセ）

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（または e-mail:teiyo@s-coop.net）。正解者の中から抽選で 5 名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは 7 月 15 日です。

3 月号の解答

3 月号の「インクラインの線路を下った終点にある建物は？」の解答は 4. 琵琶湖疏水記念館でした。京都は面白い記念館や歴史館も多いのでぜひ足を運んでみてください。応募者 12 名中 12 名の方が正解でした。図書カードの当選者は、トムズさん、うぱじゅーさん、(*・ω・*) さん、あっきーさん、GA さん（順不同）です。おめでとうございます。

（きもの）

読者からひとこと

毎年三月号は新入生特集として、文庫と新書から新入生に読んでほしい本を選んで紹介しています。今回は本特集に関連したご感想を複数いただきました。

○今回の特集、在学生の私もいろいろ読みたいと思わせるものでした。また読みたい本が増えました。　（工・Ｓｏｓｏ）

○本の名前だけは知っているが、その内容を知らないものが、今回結構とりあげられていて、読書欲をふくらませてくれた。

（市民・はじめ）

――新入生向けと銘打ってありますが、やはり古典的な名著の紹介が多くなるので、案外参考になることもあるかと思います。有名な本でも、実際に読んだことのある人は少ないという事態はありがちなので、本特集が読書の機会になれば幸いです。

○主観ですが春らしく心機一転を感じさせる本の紹介が多かったようで、さわやかな気持ちになりました。　（防災研・山桜）

――ありがとうございます。どうしても新刊の紹介に偏りがちなので難しいのですが、書評でも季節感を出していけるよう、特集などで努力してゆきたいですね。　（蕨餅）